

# 柎の実

泉鏡花

青空文庫



朝六つあさむの橋を、その明方あけがたに渡つた——この橋のある処ところは、い  
 ま麻生津あそうづという里である。それから三里ばかりで武生たけふに着いた。  
 みちみち可懐なつかしい白山はくさんにわかれ、日野ヶ峰ひの みねに迎えられ、やがて、  
 越前の御嶽みたけの山懐やまふところに抱だかれた事はいうまでもなからう。——  
 武生は昔の府中ふちゆうである。  
 その年は八月中旬、近江おうみ、越前の国境くにぎかいに凄すさましい山嘯やまつなみの  
 洪水でみずがあつて、いつも敦賀つるが——其処そこから汽車が通じていた——へ  
 行く順路ゆの、春日野峠かすがのとうげを越えて、大良たいら、大日枝おおひだ、山岨やまそばを断きりぎ  
 崖しの海に沿う新道しんみちは、崖しんみちくずれのために、全く道の塞ふさがつた事  
 は、もう金沢を立つ時から分つていた。

前夜、福井に一泊して、その朝あさむ六つ橋ぼし、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俣くるまで過ぎて、九時頃武生に着いたのであつた。——誰もいう……此処ここは水の美しい、女のきれいな処である。柳屋やなぎやの柳の陰に、門走かどはしる谿河たにがわの流ながれに立つ姿は、まだ朝霧をそのままの萩はぎにも女郎花おみなえしにも較べらるる。が、それどころではない。前途ゆくてのきづかわしきは、俣くるまもこの宿しゆくで留とまつて、あとの山路は、その、いずれに向つても、もはや通じないと言ふのである。

茶店の縁えんに腰を掛けて、渋茶を飲みながら評議をした。……春日野の新道しんみち一条ひとすじ、勿論もちろん不可いけない。湯ゆの尾畔おにかかる山越え、それも覚束おぼつかない。ただ道は最も奥で、山は就なかん中ずく深いが、栃

ちのき  
 木峠なかから中の河内かわちは越せそうである。それには一週間ばかり以こ  
のかた来、郵便物が通ずると言うのを聞くさえ、雁かりの初はつ日よりで、古むかし  
 の名将、また英雄が、涙に、誉ほまれに、屍かばねを埋うずめ、名を残した、あの、  
 山また山、また山の山路を、重かさなる峠を、一羽いちわでとぶか、と袖そでをし  
 め、襟えりを合あわせた。山さん霊んれいに対して、小こさな身体からだは、既に茶店の  
 屋根のぞを覗みく、御嶽みたけの顚あこに吞なまれていたのであつた。  
 「気をつけておいでなせえましょ。」……なわて暇なは荒あれて、洪水でみずに松  
 の並木も倒れた。ただ畔あぜのような街かい道どう端ぱたまで、福井の車夫は、  
 笠を手にして見送りつつ、われさえ指さす方かたを知らぬ状さまながら、式かた  
 ばかり日にやけた黒い手を挙げて、白しらくも雲もの前ゆくて途てを指した。

秋のはじめの、空は晴れつつ、熱い雲のみ往来して、田に立つ

人の影もない。稲も、畠はたも、夥おびただ多しい洪水のあとである。

道を切つて、街道を横に瀬をつくる、流ながれに迷つて、根こそぎ倒れた並木の松を、丸木橋とよりは筏いかだに踏ふんで、心細さに見返ると、  
くるまや車夫はなお手てびさし廂して立つていた。

翼をいためた燕つばめの、ひとり地ちずれに辿たどるのを、あわれがつて、去りあえず見送つていたのであろう。

たださえ行ゆきなや悩むのに、秋暑しという言葉は、残暑きびの酷きびしさよりに身にこたえる。また汗の目に、野山の赤いまで暑かつた。洪水でみずには荒れても、稲葉いなばの色、青菜の影ばかりはあろうと思うのに、あの勝山かつやまとは、まるで方角が違うものを、右も左も、泥の乾いた煙草畑たばこばたけで、喘あえぐ息さえ舌からに辛い。



だけれども、この道中には困却した。あまつさえ……その年は何  
 処こも陽気が悪かったので、私は腹を痛めていた。祝儀らしい真似  
 もしない悲しさには、柔やわらかい粥かかゆとも誂あつらえかねて、朝立あしたった福井の旅は  
 籠たごで、むれ際ぎわの飯を少しばかり。しくしく下腹したらの痛む処ところへ、洪水でみず  
 のあとの乾から早はは真しんにこたえた。鳥打帽とりうちぼうの皺しなびた上うへへ手てぬぐい拭ぬぐの  
 頬ほかむりぐらいでは追お着つかない、早はやや十月じゅうがつの声を聞いていたから、  
 護身用ごしんようの扇子せんすも持もたぬ。路みち傍ばたに藪やぶはあつても、竹たけを挫くじき、枝えだを  
 折いるほどの勢いきおいもないから、玉江たまえの蘆あしは名なのみ聞きく、……湯ゆのよう  
 な浅沼あさぬまの蘆あしを折取おりとつて、くるくるとまわしても、何なに、秋風あきかぜが吹  
 くものか。

が、一刻も早く東京へ——唯ただその憧憬あこがれに、山も見ず、雲も見



ず、無二無三むにむさんに道を急いで、忘れもしない、村の名の虎杖いたどりに着いた時は、杖つえという字すに縋すがりたい思おもがした。——近頃は多く板いたど取りと書くのを見る。その頃、藁家わらやの軒のきふだ札には虎杖村と書いてあつた。

ふと、軒に乾した煙草の葉と、蕃椒とうがらしの間に、山駕籠やまかごの煤すすけたのが一挺掛かかつた藁家を見て、朽縁くちえんへどうと掛けた。「小父おじさんもう歩行あるけない。見なさる通りの書生坊しよせつぼうで、相当、お駄賃もあげられないけれど、中なかの河内かわちまで何とかして駕籠かごの都合は出来ないでしよつか。」「さればの。」耳にかけた輪数珠わじゆずを外はずすと、木綿めんもん小紋こもんのちゃんちゃん子、経肩衣きようかたぎぬとかいって、紋の着いた袖なしを——外は暑いがもう秋だ——もつくりと着込んで、裏納うらなん

戸どの濡縁ぬれえんに胡坐あぐらかいて、横背戸よこせどに倒れたまま真紅まつかの花の小さ  
 くなつた、鳳仙花ほうせんかの叢くさむらなを視めながら、煙管きせるを横銜よこぐわえにしてい  
 た親仁おやしが、一ひと膝ひざずるりと摺ずつて出て、「一ひと肩遣かたやつても進じよ  
 うがの、対手あいてを一つ聞きかなくては、のう。」「お願いです、身体からだ  
 もわるし、……実に弱よりました。」「待まちたつせえ、何とかすべ  
 い。」お仏壇ぶつだんへ数珠ずしゆを置くと、えいこらと立つて、土間どまの足半あしなかを  
 突掛つつかけた。五十の上だが、しやんとした足つきで、石碓道いしころみちを向  
 うへ切きつて、樗おうちの花が咲さきかさな重おもりつつ、屋根やねぐるみ引ひつたむ傾かたむいた、  
 日陰ひかげの小屋こやへ潜くぐるように入いつた、が、今度は経肩衣きんかたぎを引脱ひきぬいで、  
 小脇こわきに絞しぼつて取とつて返かへした。「対手あいても丁度よ可よかつたで。」一人ひとりで  
 駕籠かごを下おろすのが、腰こしもしやんと楽やすなもので。——相棒あひだちの肩かたも広い、

年紀としも少し少いわかのは、早や支度したくをして、駕籠の荷にないぼう棒ぼうを、えッ  
 しと担かぎ、片手に——はじめて視みた——絵で知つたほぼ想像のつ  
 く大きな蓑みのむし虫むしを提さげて出て来たのである。「ああ、御苦勞様——  
 —松たいまつ明みつですか。」「えい、松明たいまつでや。」「途中、山路で日が暮  
 れますか。」「何、歸りの支度でや、夜よ嵐あらしで提ちようちん灯ちんは持たね  
 えもんだで。」「中の河内までは、往ゆき還かえり六里余と聞きく。——駕  
 籠は夜をかけて引返すのである。

留守に念も置かないで、そのまま駕籠を昇かきだ出した。「おお、あ  
 んばいが悪いだね、冷えてはなんめえ。」「樹立こたちの暗くくなつた時、  
 一度下おろして、二人して、二人が夜道の用意をした、どんつくの半は  
 纏んでんを駕籠の屋根につけたのを、敷かせて、一枚。一枚、背中に

当あてがつて、情なさけに包んでくれたのである。

見上ぐる山の巖いわ膚はだから、清水は雨に滴したたつて、底知れぬ谷暗く、風は梢こずえに渡りつつ、水は蜘蛛手くもてに咀そはを走つて、駕籠は縦になつて、

雲を仰ぐ。

前さき棒ぼうの親仁おやじが、「この一山ひとやまの、見さつせえ、残らず柄とちの木

の大木おほきでや。皆五抱いつかかえ、七抱ななかかえじや。」「森しん々しんとしたもん

でがんしようが。」と後棒あとぼうが言を添える。「いかな日にも、は

あ、真夏の炎天にも、この森で一度雨の降らぬ事はねえのでの。」

清水しみずの雫しずくかつ迫り、藍縞あいじまの袷あわせの袖そでも、森林の陰かげに墨染すみぞめして、

襟えりはおのずから寒かつた。——「加州家かしゅうけの御先祖おんせんぞが、今の武生たけふ

の城しろにござらした時から、斧おの入れずでの。どういうものか、は

い、御維新前まで、越前の中で、此処ここの一山ひとやまは、加賀領でござつたよ——お前様、なつかしかんべい。」「いや、僕は些ちつとでも早く東京へ行きゆきたいんだよ。」「お若いで、えらい元氣じやの。…：はいよ。」「おいよ。」と声を合わせて、道割みちわれの小滝を飛んだ。

私は駕籠の手に確しかと縋すがった。

草に巨人の足跡の如き、沓形くつがたの峯の平地ひらちへ出た。巒々らんらん相あい迫まった、かすかな空は、清朗にして、明碧めいへきである。

山氣さんきの中に優しい声して、「お掛けなさいましな。」軒は巖いわを削れる如く、棟むね広く柱黒き峯の茶屋に、木の根のくりぬきの火鉢を据えて、畳たたみ二畳にも余りなん、大熊の皮を敷いた彼方かなたに、出迎

えた、むすび髪の色白な若い娘は、唯見ると活けるその熊の背に、片膝して腰を掛けた、奇しき山媛の風情があつた。

袖も靡く。……山嵐として、白い雲は、その黒髪の肩越に、裏座敷の崖の欄干に掛つて、水の落つる如く、千仞の谷へ流れた。

その裏座敷に、二人一組、別に一人、一人は旅商人、二人は官吏らしい旅客がいて憩つた。いずれも、柳ヶ瀬から、中の河内越して、武生へ下る途中なのである。

横づけの駕籠を覗いて、親仁が、「お前さま、おだるけりや、お茶を取つて進ぜますで。」「いいえ出ますから。」

娘が塗盆に茶をのせて、「あの、栃の餅、あがりですか。」

「駕籠屋さんたちにもどうぞ。」 「はい。」 ——其処そこに三人の客にも酒はない。皆枳きの實の餅の盆を控えていた。

娘の色の白妙しろたえに、折敷おしきの餅は渋しぶながら、五ツ、茶の花のように咲いた。が、私はやつぱり腹が痛んだ。

勘定の時に、それを言つて断ことわつた。 —— 「うまくないもののように、皆残して済みません。」 ああ、娘は、茶碗を白湯さゆに汲みかえて、熊の胆いをくれたのである。

私は、じつと視みて、そしてのんだ。

枳の餅を包んで差寄さしよせた。「堅くなりましようけれど、……あの、もう二度とお通りにはなりません。こんな山奥の、おはなしばかり、お土産みやげに。 ——この実を入れて搗つきますのです、あの、

餅よりこれを、お土産に。」と、めりんすの帯の合せ目から、こ  
とりと拾つて、白い掌てで、こなたに渡した。

小さな鶏卵たまごの、軽く角かどを取つて扁ひらめて、薄うす漆うるしを掛けたよう  
な、艶つややかな堅い実である。

すかすと、きめに、うすもみじの影が映うつる。

私はいつまでも持つている。

手箏てだんすの抽斗ひきだし深く、時々思おも出いだして手に据すえると、殻からの裡なかで、  
優やさしい音ねがする。







# 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2001（平成13）年2月5日第21刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月初版発行

初出：「新小説」

1924（大正13）年8月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：米田進、鈴木厚司

2003年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 栞の実

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>